5 金壽卿［1989］から読む 韓国の歴史比較言語学の一様相

コ　ヨンジン

1. 序論

韓国や日本で出版された多くの言語学概説書では、言語学とは「言語に関する科学的研究」であるとして言語学が定義されている。あるいは、そのような定義が明示的に示されておらずとも、言語研究では、その「事実」を暗黙裡に受け容れてはじめて議論が進められる。だから、言語に関する研究は、常に価値中立的であるということを前提に行われる。

だが、具体的なことは本論で言及するが、「息苦しい歴史的な変革が迫っていたり、社会的な葛藤が尖鋭化するときには、各学問分野がもっていた政治的、理念的属性が表面にふっと現れる場合」［金河秀 2008：22］があるが、「言語学も決してその例外ではなかった」［田中克彦 2003：27］のである。私たちは、その典型的な事例を韓国の歴史比較言語学に見ることができると考えているのだが、本稿ではまさにそうした観点から金壽卿［1989］を読み解いてみようと思う【図1】。

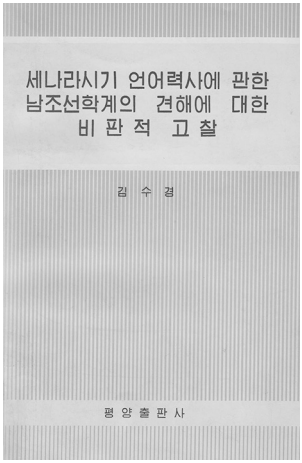


図1　金壽卿『3国時期言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察』（1989）

2.「日韓両国語同系論」とその周辺

2-1. 金澤庄三郎［1910］

朝鮮語の系統が日本語と同じであるという説は、「日韓併合」を前後した時期に、主として日本で主張された。「L. de Rosny、W. G. Aston、E. H. Parker、J. Edkins らの西洋の学者や、大矢透、白鳥庫吉、宮崎道三郎、金澤庄三郎、稲垣光晴らの日本の学者が多くの業績を残した。特に Aston と金澤の労作は、この時期の最大の成果であり、白鳥の語彙比較もまた小さからぬ業績」［宋敏 1969：7］だと評価されている。この頃は、「比較研究が草創期的な性格を脱皮することができずにい」［宋敏 1967：7］たものの、「比較研究に対する意欲は最も旺盛だった時期」であり［宋敏 1969：7］、そうした「語彙比較を通じて韓国語と日本語が同系であると同時に、両民族もまた同族であると主張することによって、ちょうど起きていた日本の韓国併合に対する政治的な大義名分を提供したりもした」［宋敏 1969：7］のである。特に金澤庄三郎の『日韓両国語同系論』［1910］は、英語でも同時に発表されたため海外にも広く知られ、日本語と朝鮮語の比較研究にも大きな影響を及ぼしたものとされている［金芳漢 1983：42-43］。のみならず金澤のこの研究は、本人の意思とは関係なく、内容においてはもちろんのこと、そのタイトルが漂わせる役割を濃厚に果たした結果、以下の田中克彦の評価に見られるように、言語系統論と侵略主義を議論するときには決まって言及される定番となった。

> ［ソンメルフェルトは］言語の系統論と人種主義とが常に危険な癒着をひき起し、暗い野心につながるおそれを、日本についても指摘している。
>
> 南アメリカ征服のための足場を準備しようとして、日本人どもは古代アメリカの諸文明が日本に起源をもつという神話をふりまいている。かれらはインカ文明の創始者なのだそうだ。日本政府は

このでたらめを証明しようとして、書物の刊行に金を出した。もし人種主義が言語系統論に補強されて、侵略を助けた例を挙げるなら、ソンメルフェルトは、このような、いかがわしい根拠にたった「南米征服説」ではなく、むしろ朝鮮やモンゴルの例を選ぶべきであった。言語系統論と侵略主義との関係は、いつでもあからさまで直接的であるとはかぎらないとはいえ、たとえば「日鮮同系論」が大衆的基盤を持つに至ったとすれば、こうした議論が朝鮮の植民地化政策のもとで好意的な扱いを受ける機会の多かったことが影響している。［田中克彦 2003：37］

この問題に関連しては、金壽卿［1989：105］もまた次のように批判している。

日本人言語学者・金澤庄三郎の『日朝（ママ）両国語同系論』が1910年に刊行されたという事実それ自体が偶然ではないし、この本の序説において「韓国の言語は、我大日本帝国の言語と同一系統に属せるものにして、我国語（日本語を指す-引用者）の一分派たるに過ぎざること、恰も琉球方言の我国語におけると同様の関係にあるものとす」と書き、結論部分で「斯して日韓両国民互いに国語（日本語）を了解して、遂に古代における如く再び同化の実を挙ぐるに至らば、真に天下の慶事といふべきなり」と締めくくっていることを通じても、植民地政策遂行のために日本人がどれほど恥知らずにも科学と真実を歪曲しているかを十分にうかがい知ることができる。

だが上記のような金澤の主張は、朝鮮の「併合」が完了した後は当然その効力を失い、それにともなって彼の主張も忘れ去られていった。のみならず、「1898年に日朝両国語の類似するもの二百語余りを挙げて、日本民

族の半島および大陸の種族との密接な関係を疑わなかった白鳥は、1909年に両国語は当初の期待ほど親密な関係にはないと述べ、14年には金澤の『日韓両国語同系論』を「臆断」と批判」［石川遼子 2002：64］するに至った。すなわち白鳥は「併合」以降と、朝鮮語と日本語が同じ系統であるという見解から全く手を引いてしまったのである。さらに、「日韓併合直後から日朝同祖論自体が重要視されなくなり、教授をしていた東京外国語学校朝鮮語学科が廃止され、金澤は教授職を辞任することに」［石川遼子 2012：100］なるなど、彼の個人的な境遇も「同系論」と同じ道を辿ることとなった。

2-2. 河野六郎［1945］とそれ以降

金澤において本格化した「日韓両国同系論」は朝鮮の植民地化以降消えていったかにみえたが、必ずしもそうとばかりは言い切れないようである。

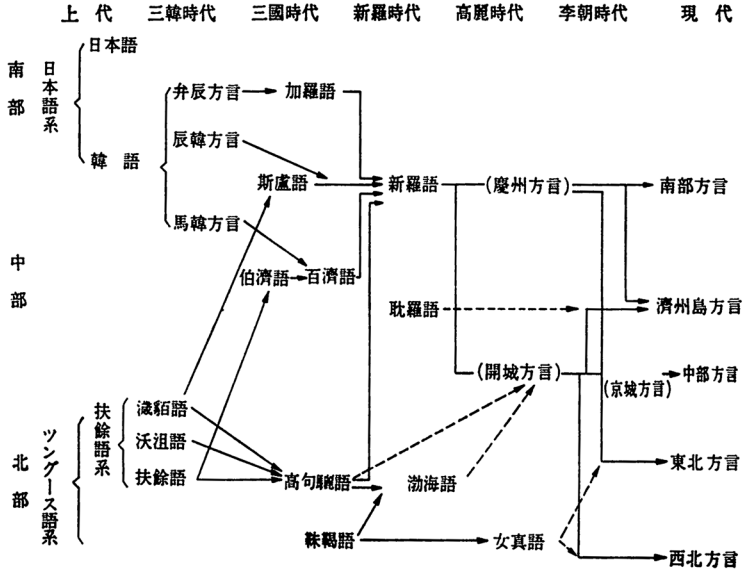


図2 河野六郎［1945］の系統図

上記の系統図【図2】[1]は「云ふ迄もなく暫定的なもの」［河野 1945/1979：273］ということを前提に提示されたものであるが[2]、この図はさまざまな事実を物語っている。このうち本稿で私たちの関心をひくのは次の部分である。

（1）日本語と朝鮮語は系統が同じである。
（2）新羅語の直接の祖語となる斯盧語と高句麗語とはそれぞれ異なる言語である。
（3）現代朝鮮語は新羅語の後裔であり、新羅語は斯盧語の後裔である。

このうち（1）（2）については、河野の次のような発言において確認することができる。

> 斯くてこの古い時代の言語状況を考へて見ると、南には韓語系の言語、東には濊語系の言語、東北には沃沮系の言語、そして西北に中国語系の言語が行はれてゐたことが知られる。而して西北の中国語系の言語は漢楊雄の撰と称せられる「方言」の中にその断片が止められてゐるが、これは一の方言を為し、この方言は燕（今の河北省）の方言と密接なる関係があつたことが伺はれる。其他の言語に就いては濊語と沃沮語とは後述の高句麗語と共に扶余語系といふ一大語系に属してゐるらしい。この語系に対して韓語が如何なる関係に立つか、今日尚不明で

[1] 河野自身の用語は「系統譜」である。
[2] この系統図は『河野六郎著作集1―朝鮮語学論文集』（平凡社、1979）に収録された「朝鮮方言学試攷」（272頁）からの引用である。よく知られているように、同書の初版は1945年4月に東都書籍株式会社京城支店から刊行されたものであり、李珍昊教授による韓国語訳は『한국어 방언학 시론（韓国語方言学試論）』という題目で2012年9月に全南大学校出版部から刊行された〔訳注：日本語版では重訳を避けるため著作集より直接引用した。また、旧字体は新字体に直した。以下同じ。〕。

ある。然し一方韓語が我が国の言語と可也近い関係にあつたらしい事は零碎な韓地名から推測せられるが、この事は考古学上から南朝鮮の石器時代遺物が我が国の夫れに類似せる事実と相俟つて確かに興味ある事である。［河野 1945/1979：259-260］

また（3）は、①前掲系統図において開成（ケソン）方言が新羅語の一方言となっている点、②高句麗語は渤海（ぼっかい）語へと継承されはしたが、開成方言とは高句麗語と渤海語のいずれもが点線でつながっている点において確認することができる。それだけではなく、これに関連して河野が次のように直接的に言及している事実もまた見逃すことのできない重要な事実である。

此の半島北半の地は上述の如き紆余曲折があつたにも拘らず、言語的には空白である。それが現在の朝鮮語の成立に寄与した貢献はあまり多くないと思はれる。現在の朝鮮語にとつて重要なのはむしろ南部朝鮮である。［河野 1945/1979：260］

現在の朝鮮語は高麗を通して新羅語の延長であるから、其の基体は斯慮語である［河野 1945/1979：262］

このような河野の主張は、解放後にも韓国の学者に多くの影響を与えたと判断される。たとえば、解放からそれほど経っていない時期に刊行された金亨奎（キムヒョンギュ）［1953：34］の「この地の先住民族である北方の濊（わい）・貊（はく）・沃沮（よくそ）・高句麗族の言語を代表する言語と、南側の三韓時代を経て百済を統一し高句麗族を駆逐した新羅語が、代表的な韓族の言語の2系統であると大きく区分することができるであろう。では、今日のウリマル〔朝鮮語〕はそのうちどの系統の言語なのか？（中略）私は、今日のウリマルは韓族の言語である新羅語が中心となり、ここに北方系の高句麗語は若干の痕跡を残し

て消えてしまったと考えられる」という発言において、その一端をうかがい知ることができる。

そして金壽卿［1989］が主たる批判の対象とした李基文（イギムン）教授のさまざまな業績においても大きな影響を与えたものと考えられる。ただ「日本語系」という河野の主張は、以下にみるように、李基文［1973b：233］において激烈な批判の対象となった。

> 今日、私たちが喋っている韓国語は、広く見て韓系諸語、狭く見て新羅語を根幹として形成されたものであるが、この系統圏[3]によれば、これは「日本語系」に属するものとなっている。この「日本語系」という用語は、河野六郎の韓国語と日本語の同系説の真意をあらわにする重大な証拠となる。彼は上古の三韓を、日本の言語圏に属していたものと見ていたのである。（中略）これは日帝末期の特殊な状況の下で主張されたことであり、無視しておいてもよいものではないかとの主張もあり得る。だが「終戦」以降も、日本の学者らの間では、このような考え方が根深く刻み込まれていることを、私たちは冷静に見据えなければならない。「良心的」だといえる学者の文章においても、古代の南韓は倭の棲息地だったかのように書いているのを時おり見かけることがある。このような主張にもとづき、言語学者らは古代南韓に倭の言語（すなわち日本語）があったと推定したりもしている。

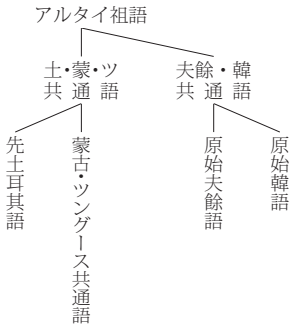
しかし、金壽卿［1989：109］は「李基文教授の文章は、河野六郎の見解を全面的に批判しているように見えるが、実のところ彼はここで韓語を日本語系と主張することに対して、それから高句麗語をツングース語に所属

---

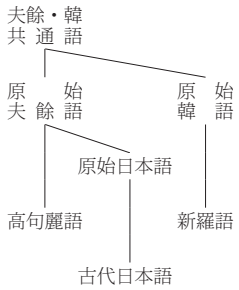
[3]（引用者注）先に提示した河野六郎の『朝鮮方言学試攷』の系統図を指しているが、李基文［1973b：233］では「不必要な部分は省略」して提示されている。

させることに対してのみ批判しているのであって、朝日同系説や、朝鮮半島を南北に割って南は韓語系、北は扶余語系とすることに対しては一言も批判しないでいる。それだけではなく、まさにその部分はそのまま踏襲し、自らの『理論』の根拠と」していると批判する。彼の批判は次の（ロ）の系統図【図3】[4]にまで向けられる。

（イ）李基文［1969：89］



（ロ）李基文［1969：91］



（ハ）李基文［1972：41］

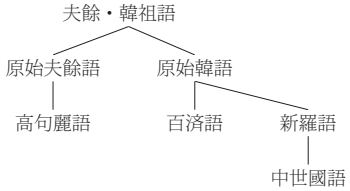


図3　李基文の系統図

---

[4] 金壽卿［1989：109-110］において直接引用し、批判されている系統図は本文の（ロ）であるが、理解を助けるため（イ）と（ハ）もあわせて提示した。また、本文の（イ）～（ハ）以外に、李基文［1998：53］にも系統図が提示されているが、それは表記がハングルになっているだけで、その内容は本文の（ハ）と同じである。そして（ロ）の系統図については、李基文［1968：139］の脚注37で「原始日本語－古代日本語」の位置が左側の外へ出なければならないのに中に入っているので、この機会に訂正する」と述べている。

この系統図と、先に見た河野の系統図は似ている点が少なくないが、これについて金壽卿［1989：109-110］は上の（ロ）を引用し、「韓語と扶余語を南北に分断している点、そしてここに日本語を引っ張り込んだ点において特に異なる点はない。違う点があるとすれば、ただ日本語の位置を韓語系から扶余語系に移しただけ」だとし、次のように批判した。

> 高句麗語が新羅語と異なる言語だったとする彼の主張は、決してその何やら「独自的」な研究の結果から出てきたものではなく、かつてわが国を強占していた日本人がかれらの植民地政策を強行するために、わが民衆の頭のなかに深く注入しようとした、歪曲された朝鮮史観、ゆがんだ朝鮮語史観から解放され得ないでいるのみならず、かれらに従うことをその基礎においているのである。
> わが民族とわが言語を扶余系だとか韓系だとかいい、北と南の二つの部分に分断したことは、それ自体が既に上で見たように、高句麗の歴史をそもそも朝鮮史の圏外に追いやり、わが民族の歴史と言語を矮小化、貧弱化しようという日本人の見解と直接連結しているのであるが、李基文教授が今でもその後を追って、わが国とウリマルの歴史を歪めて描写しているというこの事実は、きわめて重く、また遺憾なことであると言わざるを得ない。［金壽卿 1989：110］

結局、ここまでの議論で分かるように、金壽卿［1989］によれば、①日本語と朝鮮語は系統が同じである、②高句麗語と新羅語は相互に異なる言語である、③今日の朝鮮語は新羅語にその起源がある、という3つの主張が、全て植民地期の河野の主張に由来するものであり、それは批判を受けて当然だという話になっている。

3. 金壽卿［1989］の背景とそれが示唆するもの

金壽卿のこの本は1989年5月に刊行され、当り前の話ではあるが、執筆はその前に行われた。具体的な執筆時期については、韓国の正書法について言及している「終結形〈-ㅂ니다〉の上に過去吐〔토〕〈-았，-었〉が来る場合、南では〈보았읍니다，심었읍니다〉のように〈-읍니다〉と綴るが、北では〈보았습니다，심었습니다〉のように〈-습니다〉と綴る」［金壽卿1989：213］という記述が、ひとつの手がかりとなろう。なぜならこの内容は、同書が少なくとも現行の「ハングル正書法」が告示ないしは施行される以前に執筆されたことを示唆しているからである。よく知られていることだが、北と同様「〈-습니다〉〈보았습니다，심었습니다〉」と綴るよう定めた韓国の現行「ハングル正書法」は、1988年1月19日に当時の文教部によって告示され、1989年3月に施行された[5]。

この単純な事実は、同書の執筆および刊行について、少なくとも次の2つの事実を同時に考える必要があることを示唆している。第1に、この時期は、1987年の「6月抗争」の結果、韓国での民主主義が本格化し始めた頃だという点である。このような民主化の結果現れた動きのひとつが「北朝鮮を正しく知る運動」であり、これと関わって、当時北朝鮮の「原典」が洪水のように「氾濫」し始めたという事実にわれわれは注目しなければならないと思う。この詳細についてはさらに調査してみなければならないが、たとえば北朝鮮で「不朽の古典的名作」と言われる『血の海〔피바다〕』（1988年11月、ハンマダン）[6]、『花を売る乙女〔꽃파는 처녀〕』（1989年1月、ヨルサラム）、『ある自衛団員の運命〔한 자위단원의 운명〕』（1989年1月、黄土）などがみなソウルで出版されただけでなく、1988年1月には「主体思想叢

---

5 李基文［1988］の「머리말」および国語研究所［1988］。

6 韓国では『血海（民衆の海）』というタイトルで出版された。

書」の中の1冊である『主体思想の指導的原則』（栢山書堂）までもがソウルで出版されたのである。

第2に、言語の問題について、「氾濫」する当時の北朝鮮の「原典」とともに、真面目に提起され始めた「言語異質化論」とも結びつけて検討する必要がある。筆者は本稿執筆のためにDBpia、KISS、RISS〔いずれも韓国の論文データベース〕で「言語、異質化」をキーワードに論著を検索してみた。すると、1985年以前はそれぞれDBpia（0件）、KISS（0件）、RISS（3件）であったのに対して[7]、1985年から1989年まではそれぞれDBpia（1985-1、1986-0、1987-0、1988-2、1989-1）、KISS（1985-0、1986-0、1987-1、1988-0、1989-3）、RISS（1985-5、1986-0、1987-1、1988-2、1989-5）という結果が得られた。もちろんこの数字には重複があるかも知れないし、またその量と質も一定ではないので機械的に評価することはできないが、それでも全体的な傾向は十分に把握することができると思う。上の統計に見られるように、1980年代後半以降間歇的に登場した「言語異質化」に関する議論はその後増加しつづけ、今日に至っては、その是非は措くとしても、ひとつの言説として完全に定着したと言える。

このような2つの事実と結びつけて金壽卿［1989］を検討すると、われわれは同書が南〔韓国〕の読者を対象に執筆されたものと判断しても良いのではないかと思う。まず、金壽卿［1989］の文体がその他の北朝鮮文献とは異なるという点を指摘できるが、これについては高宗錫（コ ジョンソク）［1999：276］も「（同書は）学問的のみならず政治的・イデオロギー的に非常に敏感（センシティブ）なテーマを扱いながらも、似たようなテーマの北朝鮮文献に比べて文体が穏健である」と評している。これと関連して何よりも同書は、主に南の歴史比較

[7] 北朝鮮の言語問題研究に先鞭をつけたものとして評価されている金敏洙［1989：153］が「異質化が加速するのは明らか」だが、「憂慮していたものよりはそれほど大したものではない」と述べているのも参考になるが、金敏洙教授の同書はもともと1978年に出版されたものであったことが明らかになっている。

言語学の議論を批判的に検討する形を取っており、その内容もまた非常に激しいものであるにもかかわらず、南に対する「非難の表現」がほとんどないという点も特徴的である。特別な場合を除いては非常に中立的な「以南」という表現で一貫しており、それと対をなす用語としても「以北」を選択しているほどである。また、形式的な面においても、参考文献が示されている[8]一方、北朝鮮ではハングル専用が原則であるにもかかわらず、引用文ではない本文においても、括弧内ではあるがしばしば漢字が使われており、ローマ字やキリル文字の使用もためらっていない。さらに、北朝鮮で出された本であればそれらの本のあちこちに必ず表れるゴシック体で書かれた金日成の「教示」もまた、金壽卿［1989］では結論部分で2、3度登場するのみという点も極めて異例であると言わざるを得ない。また、「われわれがこのように民族の問題を提起すると、ある者は今日の時代はすべての事柄が世界化[9]、国際化し、宇宙化する時代なのに、時代錯誤的な水車小屋時代の民族概念を押し出す必要がどこにあるのかと反駁するかもしれない」［金壽卿 1989：199］という表現にもみられるように、南でのみ使われる「世界化」という語彙が使用されている点にも注目すべきである。これらの事実は、同書が1987年の「6月抗争」以降民主化の局面に入った韓国社会、そして韓国社会の「北朝鮮を正しく知る運動」などを念頭に、南の読者たちに民族と言語の問題をより多方面から考察させるために執筆された本だということを示唆していると解釈しても大きな問題はないと思われる。

このような彼の試みは、少なくともいくつかの点で大きな成功を収めたと思われる。同書の主な批判対象であった李基文教授の業績について何度

---

8 김영황・권승모 편［1996：596-597］には、26名の「博士学位論文」リストが提示されている。そのなかで筆者が確認することのできた15編のうち、参考文献が示されているのはわれわれが本文で検討している金壽卿の学位論文のみであった。

9 強調は引用者による。

か大小の議論が行われたという事実が、そのことを雄弁に物語っている。そのうち、「高句麗語と新羅語は異なるものではなく、高句麗語と新羅語が異なるという主張を展開する李基文教授は植民史観を繰り返しているに過ぎないので、学術院賞の受賞者にはなれない」という問題を提起したキム・ヨンファン［김영환 1993/2012：212-216］には、特に注目する必要がある。彼のこの主張は「越北した国語学者・金壽卿の『三国時期の言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察』（平壌出版社、1989）にしたが」[10]ったものであることが明らかにされているからである。これに対する反論として出されたのが沈在箕（シムジェギ）［1993/1998：194-199］であり、以下はその一節である。

> もちろん金教授は、李基文先生の理論を充分に理解し、消化したと考えているでしょう。しかし私の所見では、やはり非専攻者の眼目には限界があるのだなという残念さがあります。ある一方の学説に傾倒する余り、他の見解を受容し検討する余裕が不足しているという感じです。ある面では、真実がこれほどまでにおかしな方向に曲解されうるのだということを発見しました。［沈在箕 1993/1998：195］

上の引用に見られるように、専攻が異なること[11]を前面に押し出した彼の反論は、反論というよりは一種の説教に近く、そうして「金教授に学術的な内容を一々取り上げて議論することはせず、単に理解の助けとなるいくつかの言葉を申し上げたい」［沈在箕 1993/1998：195］と述べ、「野球場にバスケットボールの審判が入り‘アウト’を宣言する姿」［沈在箕 1993/1998：

---

[10] 김영환［2012：212］の注6参照。同書は元々『教授新聞』1993年9月1日付に掲載されたものだという。

[11] キム・ヨンファン教授の専攻は、言語学ではなく、哲学である。

198］として戯画化してしまい、結局論争らしい論争は行われなかった。

このほかにも、金壽卿［1989］において批判の当事者として名指された人々がどのような反応を示したのかについても、断片的ではあるが、いくつか探し出すことが出来る。まず、金壽卿［1989］においてもっとも多くの批判を受けた李基文教授の業績に関しては、金壽卿［1989：12］において批判のきっかけとなった次の言及［李基文 1972：32］が、李基文［1998］では削除されたという点を指摘できるだろう[12]。

> 今日の国語は単一言語なので、古代においても高句麗、百済、新羅の言語が単一であっただろうという先入観に支配されてきたように思われる。しかし、そのような態度は批判されなければならない。

にもかかわらず李基文教授は、1991年8月に出版された『国語語彙史研究』の「後記」において、自身の1968年の論文について「この論文が発表された後に高句麗語に関する研究が内外の学者たちによって行われ、その語形の再構においても新たな試みが時々なされたが、筆者の考えは基本的にはこの論文を書いたときと別段変わりはない」［李基文 1991：387］と述べているだけでなく、李基文［1998：50-53］においても既存の見解を再確認しているところを見ると、彼の主張が変わったとは言い難い。

また、金壽卿［1989］において別の批判対象となった金完鎭（キムワンジン）教授も、金壽卿［1989］の批判に対して自らの見解を述べたものがある。以下がそれである。

> 李基文教授を国内外的に有名にした高句麗の位置問題についての展望をテーマとしたい。三国の言語を新羅語、百済語、高句麗語とするこ

[12] この事実は、김슬옹［2010：493］の脚注1）でも指摘されている。

とをもって是非を問う人々が一部にある。特に北朝鮮の学者のなかに、この問題を大きく誇張し、批判する傾向があることを知っているが、攻撃するための論理の針小棒大化という印象がある。本来、ある二つの地域における言葉の違いが方言的な違いか、独立した両言語の違いかを判定しうる絶対的な基準は、不幸にも用意されていないのである。（中略）言語面において非常に類似している場合でも、政治的、行政的に分離されていれば独立した言語として扱い、その反面相当の違いがあったとしても行政的に同じ圏域内にあれば一つの言語の方言として扱うのが一般的な処理の態度なのである。（中略）したがって5百年や6百年間も独立した国家として鼎立していた三国の言語にそれぞれ「語」の字をつけて呼ぶことは、言語学の慣習に少しも反するものではなく、その間の違いがどの程度であったかということを測定するのはその次の課題に属するのである。評者は、この点において李基文教授を積極的に擁護する。［金完鎭 1992：155-156］

上で確認したように、今も同書はあちこちで常に直接・間接的に引用され、いわゆる純粋言語学的側面においては歴史比較言語学への批判の呼び水となっているだけでなく、社会言語学的側面においても議論が殆どなされて来なかった韓国における民族と言語に関する問題、言語学と植民地主義に関する問題について批判的に考察することを常に喚起しているという点で、依然としてその生命力を失っていないと言えるだろう。

4. 残る問題

本稿でぜひとも扱うべきであったが時間の関係上取り上げることのできなかった、しかし非常に重要な問題がひとつある。ほかでもなく、韓国の歴史比較言語学が「民族分裂論」にいかなる影響を及ぼしているかという

問題である。このテーマは、金壽卿［1989］に貫かれているもう一つのキーワードと言っても良いが、それはわれわれが序論で提起した問題と関連させて考えると、南と北で言語に向ける眼差しが異なるということを雄弁に物語るものでもある。

もし金澤庄三郎［1910］の結論部分にある「我保護国なる韓国が、その言語においても、亦我国語の一方言たる実を有し、明らかに同文同語の国なりといふ事実の一斑を示し…」「遂に古代における如く再び同化の実を挙ぐるに到らば、真に天下の慶事といふべきなり」[13]という内容を引用し、「韓国語と日本語の関係を最も接近させて考えたのは金澤庄三郎（1910）であった。だが彼の見解は、当時日本が韓国に対して行っていた侵略と密接に結びついたものであった」という李基文［1973：15］の言及をそのまま受け入れるならば、序論においてわれわれが提起した問題、すなわち言語学は常に価値中立的かという問題を再検討する必要があると言わざるを得ない。言い換えると、「日韓両国語同系論」が日本の朝鮮侵略を合理化するのに利用された言語理論であるならば、現在南と北で研究されている言語学のある一側面が「民族分裂論」に結果的にであれ利用されてはいないか検証してみる必要もあるのではないかということである。したがって、今後このような問題が現実的に存在するのか、もし存在するのであればそれはどのような姿なのかなどを追求し、具体化することが、われわれの目の前に置かれた課題であると言えるだろう。

〈参考文献〉

【コリア語】
고종석（高宗錫）［1999］『국어의 풍경들』，문학과지성사.

[13] 以上は李基文［1973c：15］からの引用であるが、本稿では重訳を避けるため、金澤［1910：59、60］より直接引用した。

국어연구소（国語研究所）［1988］『한글 맞춤법 해설』，국어연구소.
김민수（金敏洙）［1989］『증보판 북한의 국어연구』，일조각.
김방한（金芳漢）［1983］『한국어의 계통』，민음사.
김수경（金壽卿）［1989］『세나라시기 언어력사에 관한 남조선 학계의 견해에 대한 비판적 고찰』，평양출판사（『고구려・백제・신라 언어연구』，한국문화사 영인본，1995）.
김슬옹（キム・スロン）［2010］“삼국시대 언어의 동질설・이질설과 한국어 계통론”，전정예 외，『새로운 국어사 연구론』，경진，490-502.
김영환（キム・ヨンファン）［2012］『한글 철학』，한국학술정보㈜.
김영황（キム・ヨンファン）・권승모（クォン・スンモ）편［1996］『주체의 조선어연구 50년사』，김일성종합대학 조선어문학부.
김완진（金完鎭）［1992］“서평；이기문［1991］，『국어 어휘사 연구』”，『주시경학보』제9집，주시경연구소，149-157.
김하수（金河秀）［2005］“제국주의와 한국어 문제-제국주의와 민족주의가 한국 언어학에 미친 영향을 중심으로”，미우라 노부타카・가스야 게이스케 엮음，『언어제국주의란 무엇인가』，돌베개，479-511（이연숙・고영진・조태린 옮김）.
――― ［2008］『문제로서의 언어2：민족과 언어』，커뮤니케이션북스㈜.
김형규（金亨奎）［1953］『국어사（국어사 급 국어학사）』，백영사.
박병채（朴炳采）［1971］『고대국어의 연구-음운편』，고려대학교 출판부.
송기중（宋基中）［2003］『역사비교언어학과 국어계통론』，집문당.
송 민（宋敏）［1969］“한일 양국어 비교연구사”，『논문집 1』，성신여자대학，5-93.
심재기（沈在箕）［1998］『교양인의 국어 실력』，태학사.
이기문（李基文）［1961］『국어사개설』，민중서관.
――― ［1969］“한국어형성사”，고려대학교 민족문화연구소，『한국문화사 대계9-언어・문학사（상）』，고대민족문화연구소출판부，19-112.
――― ［1972］『개정 국어사개설』，민중서관.
――― ［1973a］“언어상으로 본 고대 한일 관계，”『신동아』1973년 1월호，104-110.
――― ［1973b］“한국말의 조상，”『월간중앙』1973년 3월호，중앙일보사，230-236.
――― ［1973c］“한국어와 일본어의 어휘비교에 대한 재검토，”『어학연구』제9권 제2호，서울대학교 어학연구소，1-19.
――― ［1991］『국어 어휘사 연구』，동아출판사.
――― ［1998］『신정판 국어사개설』，태학사.
이시카와 료코（石川遼子）［2006］“가나자와 쇼자부로 땅과 사람 그리고 언어는 하나다，”다테노 아키라 편저，『그때 그 일본인들，한길사』（오정환，이정환 옮김），161-167.
――― ［2012］“가나자와 쇼자부로와 조선어，”고영진・김병문・조태린 편，『식민지 시

기 전후의 언어 문제』, 소명출판, 91-119.
이현희（李賢熙）［1992］“북한의 국어사 및 국어학사 연구”, 『어학연구』 제28권 제3호, 서울대학교 어학연구소, 657-685.

【日本語】
石川遼子［2002］「金沢庄三郎―同祖論の飽くなき追究」舘野晳編著［2002］『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人』明石書店.
金澤庄三郎［1910］『日韓両国語同系論』, 三省堂書店.
田中克彦［2003］『言語の思想』, 岩波書店.
河野六郎［1945］『朝鮮語方言學試巧』, 東都書籍株式会社京城支店.
――――［1945/1979］「朝鮮語方言學試巧」,『河野六郎著作集1』, 平凡社.（韓国語版：이진호 역（2012), 한국어 방언학 시론, 전남대학교 출판부).
――――［1971］「中国語・朝鮮語」, 服部四郎編（1971),『言語の系統と歴史』, 岩波書店, 303-322頁.